



## 「七福神」 長崎史談会 会長 原田 博二

会員の皆様、明けましておめでとうございます。本年も宜しくお願い申し上げます。

七福神というのは、恵美須、大黒天、毘沙門天、弁才天、

福祿寿、寿老人、布袋の7つの神様である。この七福神の国籍であるが、大黒天、毘沙門天、弁才天がインドで、福祿寿、寿老人、布袋が中国であるが、恵美須は、川柳に「宝船 日本からも 一人乗り」とあるように日本である。また、布袋だけが契此といって実在の禅僧がモデルであるが、他は全て架空の神様や仏様である。

ところで、わが国では、福祿寿と寿老人はともに長い頭に描かれるなど、同じ神様する意見が古くからあったが、その場合は、寿老人の代わりに吉祥天や狛々といった神様を入れるようである。

### 大黒天

大黒様は、童謡にも「大きな袋を肩にかけ」とあるが、わが国では、大国主命、この「おおくに」が「だいく」に通じることから、大国主命が大黒様とされた。しかし、大黒天は、本来はインドのヒンズー教のマハーカーラという破壊、もしくは戦の神大黒天だったのである。つまりマハーは大、カーラは黒のことである。ところで、この破壊、もしくは戦の神だった大黒天は、怒の顔であったが、仏教に取り入れられると、次第に大黒様特有の円満そのものの顔になったのである。ところで、大黒様は、肩に担いだ大きな袋のなかには、金銀財宝がどっさり入っており、手に持つ小槌からは、どんな宝物も好きなままに出すことができるという、とても有難い神様なのである。ところが、大黒様の頭の大きな頭巾、これは上を見るなどということ、足に踏んでいる俵2俵は、この2俵で満足しなさいということ、ともに「謙虚でありなさい！」と日頃の生活の無駄、贅沢を戒めているのである。

恵美須様は、七福神のなかでは唯一日本の神様で、イザナギノミコトとイザナミノミコトの間に生まれた夷三郎といわれている。恵比寿様は、一般的には風折烏帽子をつけ、狩衣に指貫という着物を着て、右手に釣竿を持ち、左手で大きな鯛を抱えているように、大漁の神様とされている。これは、恵美須様は釣をしても、網でもってやたらと魚を取らないことから、それが暴利を貪らない清潔な心を象徴しているということで、現在に至るまで、商売繁盛の神様として多くの信仰を集めているのである。

### 毘沙門天

毘沙門天は、もとはインドのヒンズー教の神で、財宝の神様とされたクペーラがその原型である。このインドのヒンズー教の神が仏教に取り入れられて、四天王、もしくは十二天の一つとされたのである。四天王というのは、東、西、南、北の四つの守護神とされた、持国天、増長天、広目天、多聞天であるが、この多聞天が毘沙門天のことである。というのは、毘沙

門というのは、梵語で「多聞」という意味の「バイシュラバナ」といい、「全てを漏らさず聞くことのできる賢い人」という意味である。毘沙門天は、千年にも及ぶ苦しい修行の後、梵天王から北の方角の守護神と財宝の神に任命されたが、さらに、仏教では戦の神、さらには、正義の神とされた。毘沙門天は、一般に左手に宝塔、右手に宝棒を持っているが、宝塔は人々への福德を、宝棒は攻撃からの防御、つまり魔除をそれぞれ表している。

### 弁才天

弁天様は、七福神のなかでは唯一の女性の神様で、現在でも弁天様といえば、美人の代名詞である。この弁天様は、もとはインドのヒンズー教の神で、サラスバアティーという水の神であった。また、このサラスバアティーというのは、インドでガンジス川と並び称されたサラスバアティー川を神格化した女神で、梵天王の妃とされている。この水の神サラスバアティーは、川の流れる音から音楽の神様、芸術の神様とされたが、弁才天と書く場合は、この芸術の神様で、よく琵琶を持つ姿に造られている。しかし、これに対して水が大いなる収穫をもたらすことから財宝の神様ともされたが、この場合は、弁財天と書くのである。

### 福祿寿・寿老人

福祿寿も寿老人も、ともに中国の道教の神である。ところで、中国では、福祿寿は頭の長い老人で、鶴や亀を連れた姿が、寿老人は普通の白髪の老人の姿で、杖をつき鹿を連れた姿がそれぞれ一般的である。ところが、わが国では、寿老人と福祿寿を混同しているようで、ともに頭の長い老人で、杖をつき鶴や鹿を連れた姿とされている。ところで、寿老人も福祿寿も、ともに人の寿命を司るとされた南極老人星という星の化身であった。この南極老人星は、世の中が平和な時にのみ現れると信じられていた。ところで、寿老人は大変な大酒呑みだったといわれている。というのは、中国の北宋時代、皇帝が寿老人に酒を奨めたところ1石の酒を7斗まで呑み干したが、さすがにその晩は酔ったためか、その位置がいつもの位置より少しずれていたという。

### 布袋

布袋様は、七福神のなかで唯一実在の人物がモデルである。この布袋様は、中国の唐の時代の契此という禅僧で、人々から布袋さんと呼ばれた。どうして布袋さんと呼ばれたかということ、契此がいつも大きな袋を背負っていたからである。さて、この布袋様の大きな袋のなかには何が入っているかということ、この大きな袋のなかには契此の身の回りのものや托鉢でもらった食物などが入っていた。ところが、後には大黒様と同様、大きな袋のなかには金銀財宝がどっさり入っていると信じられ、福の神とされたのである。(了)